学校法人
鎌倉女子大学

読後感想文　― フーバー大統領回顧録

「たくさんの人が亡くなった。その原因は、指導者の拙い政治指導にあった。そのことが忘れられるようなことがあってはならない。だからこそ私は回顧録を執筆した」。

『裏切られた自由』（草思社）、著者は第３１代アメリカ大統領ハーバート・フーバー、上下巻１２９３頁に及ぶ大著である。氏の生前から何度か発表も試みられたが、アメリカが取った戦前からの国策、戦後の秩序と見做した正史とはおよそ対立する内容をもつところから、封印されたまま、没後半世紀を経過してようやく日の目を見ることになった。

本書は、２０世紀前半のソ連邦の誕生から第二次世界大戦への道、戦前から潜在していた社会主義と資本主義の対立が大戦後顕在化した朝鮮戦争をもって終章に至る。

長らくヨーロッパとの相互不干渉を貫くモンロー主義のアメリカをヒトラーの英仏侵攻に対抗するためヨーロッパ戦線に引き込みたいチャーチルの思惑、中国大陸を毛沢東の手で赤化し、日本を放逐しようというスターリンの野望、ルーズベルト政権の中枢まで浸透していた共産主義者の暗躍、東京が和平を模索しているというグルー駐日アメリカ大使の進言を黙殺するワシントンの意図等が語られていく第一級の史料である。私もこれまで二次文献等で断片的に知らされていたことも多かったが、大統領まで務めた人物が赤裸々に語るという点において出色のドキュメントといってよい。

ルーズベルトといえば、アメリカを世界恐慌から救ったニューディール政策の立役者、大戦を勝利に導いた歴代一、二位を競う大統領と称揚するのが、私が幼い頃の中学校の社会科の授業の通り相場であった。しかし、太平洋戦争への道や原爆投下の件（くだり）は、私たちが教室で教わったことと真逆の事実であり、私の中に残るものは、やっぱりそうだったのかといった遣る瀬無い感慨であった。

もっとも、フーバーが日本に好意をもっていたわけではない。実際、彼は、日本を「ガラガラヘビ」と見立て、日本人を「エゴイスト」と見做し、日本の行為を「国際合意も無視した中国への侵略」と断定し、「日本人が、１０億のアジア人を長期にわたって支配することなどできるはずはない」と診断している。私も、とりわけ満州事変から真珠湾攻撃に至る日本の国策が正しかったなどとは決して思わない。日本もまた、世界史の潮流を見失い、多くの愚策と暴走を繰り返し、あの惨憺たる悲劇を惹き起こしたのである。

しかし、「日本を刺激する方法」と題された章は、こう結論づけられるのである。「真珠湾攻撃は、予期されていただけでなく期待されていた。ルーズベルト大統領がアメリカを戦争

に導きたかったことに疑いの余地はない。ただ、政治的な理由で、最初の一撃は相手側から発せられる必要があった。だからこそ日本に対する締め付けを強めていったのである。その締め付けは、自尊心のある国であれば、もはや武器を取るしかないと思われるところまでいっていた」。フーバーは、この認識をマッカーサーとも共有している。彼は、「戦争をしたくて仕方のない狂人」であった、「ルーズベルトは、とにかく日本を挑発し続けた」と。「無条件降伏」という、「無条件の抵抗を生む」「際限なき戦いの継続」を誘発する要求を突如カサブランカで発表したのも、彼の独断であった。

「歴史修正主義」というと、自分たちの都合から定説を覆(くつがえ)すといった悪い意味で使われる場合が多い。しかし、この大作を編集したジョージ・ナッシュ氏も、邦訳した渡辺惣樹氏も、本書が「修正主義史観を示す最も野心的でかつ系統的だった書」、「歴史修正主義に立つ歴史書の傑作」と言い切っている。両氏の発言は、歴史の捻じ曲げを意図するものでは無論ない。私たちが知らなければならないことは、「歴史的普遍性」などという言葉を賢(さか)しらに口走ることではなく、歴史というものがほぼ無数の要因によって惹き起こされた事実である以上、あらゆる歴史学的努力によって、その都度隠されていた事実が発掘され、潤色された事実が淘汰され、さまざまな角度から光が当てられることによって、複雑に絡み合って生起した出来事が一歩一歩洗い出されていくということである。歴史とは、その濾過された事実の総体のことなのである。

右か左かの違いはあれ、紛れもなく共に社会主義独裁体制であったドイツとソ連について、フーバーは、この両国を「近親憎悪」と見做し、こういっている。「１９４１年６月、ヒトラーはソビエトとの戦いを開始したが、フランクリン・ルーズベルトはソビエトを助ける側にまわった。我が国はあの二人の馬鹿野郎（ヒトラーとスターリン）を徹底的に戦わせればよかったのだ」。

戦争そのものが愚かしいといえば、その通りであるが、本書の通奏低音にもなっているように、先の大戦は、敵を味方とし、味方を敵として戦った真(まこと)に愚かな出来事だった。とまれ、よし差し向けられたにせよ、自ら手を突っ込んだにせよ、世界史の車輪に巻き込まれた日本の近代史の実相は、日本人皆が知っていていいことだと思う。

＞前のページへ戻る